

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

恒例行事の充実と日常の遊びがつながる～地域の特色を活かして／静岡市立小島こども園（静岡県）

特産物や祭りなどの地域の特色を活かした恒例行事はありますか？
期待を膨らませて行事を楽しんだ子どもたちは、その後、どのように体験を深めたり広げたりしていますか？

年度末に入るこの時期、次年度の保育計画を検討されている園があることと思います。

そこで、今回は、恒例行事を楽しんだ子どもたちの活動の展開をご紹介します。



○ お茶作りに挑戦／5歳児

✦ 事例：茶摘み（5月）

園の近くにある茶畑で、お茶の先生（園児祖父）からお茶の葉の摘み方を教えてもらい、お茶摘みを体験した。毎年恒例で、5歳児は3回目の体験となる。お茶の葉に触れ、その柔らかさや緑色の美しさ、かすかにするお茶のいい香りなどを感じる子どもたち。お茶摘みから、手揉み茶作り、お茶会と子どもたちの活動が続いた。

ねらい	地域の自然に触れることを喜び、感じたことを伝え合ったり、お茶への関心を高めたりする。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 地域の豊かな自然を感じ、触れることを喜ぶ。 ● 新芽を摘むことが分かり、お茶の葉の感触や香りなどに気づき、関心を高める。 ● 自分たちが摘んだ茶葉で揉み茶を作り、味わう。

● お茶摘みを体験

- 実際に触ることでお茶の葉の柔らかさ、香、色の鮮やかさ、味を感じ、お茶の葉とはどのような物なのか？実体験から学んだ。

「この葉っぱは柔らかくて良さそうだぞ！きれいな黄緑見つけた！」

「こっちの葉っぱはちょっと固いなー！」



● 手作りのお茶摘みバック

- 袋に絵を描いたり、首にかける紐を三つ編みしたりして自分で作ることで、自分のものという意識をもつことができた。
- 「袋いっぱい摘もう！」と期待をもって取り組むことができた。
- 自分が摘んだお茶っぱの量が目に見えてわかる。→意欲につながる。
- 首にかけ、両手が使えるので茶摘みに集中できる。



● 手揉み茶作りに挑戦してみよう！！



1 ホットプレートで葉に火を通す

「わあー！ お茶の匂い！」
「ちょっと色変わってない？濃い緑！」
「熱くて葉っぱは動いてる！」

- 以前、ヨモギ団子作りをした時のように、“火を通す”ことで、色や香りに変化が生まれることに気づく。
- 形や大きさも変化していくことに気づく。
- 火を通す前後の変化に着目し、「どうしてだろう？不思議だな！」という思いから、さらに興味や関心が深まった。



2 手で揉む

「細くなるまで揉むんだよ！」
「手が緑色になってきた！」
「手がお茶の匂いになるよー！」

- 手で揉むことでさらに香りが強くなっていくことに気づく。
- 繰り返しやる中で、手の使い方のコツを掴んでいく（試行錯誤している）。
- 葉の柔らかさも変化（パリパリになる）していることに気づく。

● 味わう ～お湯を注いでみよう！～（注：衛生上の配慮を十分に行う）



「ぼくたちのお茶ができたー！」
「すごい！！本物のお茶みたい！」

感動



- 透明の急須を用意したことで、茶葉から緑色がジワーとお湯に広がる様子、揉んでよじれた茶葉が、広がっていく様子を見ることができた。
- 火を通したことでの茶葉の変化に加え、お湯に入れた時の変化にも気づく。



- 自分たちで初めて作ったお茶を、お茶の先生にも飲んでいただき、「おいしい！！」と言ってもらい大喜び！

● お茶会を開こう！



- ① まずは自分たちがお客さんを経験する。
- ② 3歳児組、4歳児組の子どもたちを招待する。
- ③ 保護者を招待する。

- お茶摘みから、お茶となって自分たちで飲むまでを実体験として学ぶことで、お茶への関心の深まりがあった。
- お茶会として友達や保護者を招待することで、自分たちが作ったもので、身近な人が喜んでくれる嬉しさを感じる姿があり、その思いがもっとやってみたい、今度はこうしてみたいという次回への期待につながっていた。



✦ 園庭での遊びに取り入れる～経験のつながり～

- 4月から、色水遊びを楽しんできた子どもたちは、翌日から園庭の藤の葉を使ってお茶作りを始めた。同じ葉を使っても、すり潰し方や水や葉の分量によって違う色合いのお茶ができる。色合いに気づき、作り方を工夫するようになる。
- 「薄い緑→優しい味（甘目）」「少し薄い緑→子ども味」「濃い緑→苦い味・大人の味」などとイメージを膨らませていく。お客さんから注文を受けると、その味に合う色を自分なりに考え、意図的に調節しながら作ることに夢中になる。



✦ 考察（学び）

- 毎年の恒例行事となってお茶摘みは、子どもたちが期待している。3年間を通して同じ経験ができることで積み重なっていく学びがある。同じ活動をしていても、子どもが感じることや学んでいることは変化しているのだから、その変化を保育者が把握し、深く追求していけるように活動や関わりを工夫していくことが大切だと感じる。
- お茶を摘むだけでなく、「お茶っ葉にしていく」「お茶会を開く」と遊びがつながり、発展していった。その中で、5歳児として自分たちでできたという達成感や満足感、友達と力を合わせたり、次はどうしようと考えたりする姿につながっていった。
- 4月から楽しんでいた色水作りは、お茶作りを経験したことでさらに色の深さ、濃淡にこだわって作る姿につながっていった。継続して子どもが繰り返し取り組める場の保障、じっくり取り組むことができる時間の保障をしていくことで、子どもの新たな気づきや、もっとこうしてみたいという思いを十分に満たすことができると感じる。
- お茶摘み、お茶作りを通して地域の自然を身近に感じる事ができた。いつも飲んでいるお茶がどのような行程でできているのかが分かり、地域の産業でもあるお茶作りに興味が高まった。